近藤芳美賞

琥　珀

芳山三喜雄（茨　城）

ひんやりと下萌え圧さえし手で触れる養蜂箱に分蜂の熱
やわらかきレンゲの丈に戻されて頼りなきほど長靴の跡
分蜂の翅音の渦に透けている春の雲間に機影の音なく
蜂飼いは北を目指してこの国の暦の上に花を絶やさず
海の上にブラキストン線またぎつつ桜前線追いかけてゆく
サービスエリアにエンジン切れば百箱の翅音ひとつにさざめいて星
流蜜の音を頼りにカーナビを消して新たな聖地巡礼
アカシアの風へ移りし蜜蜂に少し遅れて追いつく翅音
捨て蜜に粘る指ごと舐める時もっとも甘きはちみつとなる
教室に正しく揃う木机のように並べる養蜂箱も
養蜂着を祖父も使いし枝にかけ昼餉のあとの小さき欠伸
女王蜂、ばるんばるんの腹にして夏の滴り享けたる器
水たまりを楕円に象りふくふくと水呑む蜂のみな前のめり
幸せの四つ葉のクローバー蜜の終の雫は琥珀のふくらみ
逆さまにはちみつ透かす壜底に気泡が届くまでのとこしえ

作品の背景

「ミツバチが地球上から姿を消せば、4年後には人類は絶滅する」、アインシュタインの言葉と言われています（出典は不詳）。かつて昆虫少年だった私は今、ミツバチという小さな賢者たちと四季を共にしています。ヒトによる生態系の破壊が加速するなか、分蜂の翅音や流蜜の香りに包まれる時、私は救われます。複雑になりすぎた情報化社会を離れ、ただ琥珀色の季節を追う暮らし、そんな青い憧れと未来への祈りを短歌に託しました。

選にあたって

養蜂の作業を具体に即して丁寧に詠んだ一連。眼前の光景を描写するだけでなく「分蜂の翅音の渦に透けている春の雲間に機影の音なく」「海の上にブラキストン線またぎつつ桜前線追いかけてゆく」など、視点を大空や海上へとのびやかに広げているところに発想の豊かさが感じられる。アカシアの風へ移った蜜蜂、前のめりになって水を呑む蜂など、動の歌と静の歌がバランスよく並べられており、構成の整った十五首になっている。（栗木　京子）

蜜蜂の飼育をテーマにした「琥珀」は、緊密で広がりのある連作でした。冒頭から惹きつけます。「ひんやりと下萌え圧さえし手で触れる養蜂箱に分蜂の熱」。「分蜂」は、春に新旧の女王蜂が分派することです。養蜂の専門用語が、新しい手触りを生み出しています。

アカシアの風に移りし蜜蜂に少し遅れて追いつく翅音

背景には温暖化による危機も暗示され、花を追う養蜂者の旅の切迫感も伝わってきました。（佐伯　裕子）

祖父からの家業である養蜂業をモチーフとし、変動する自然と抗う仕事に生きる哀歓を詠んだ連作。蜜蜂そのものを素材にした歌はあるが、養蜂業に勤しむ類歌はない。古代以来、人類に寄与してきた蜂の進化も掌握されている。たとえば「水呑む蜂」の一首は、夏の巣内の温度が上昇した場合、巣外から水を運び込み、巣面に広げて巣温の降下を図る場面を詠む。進化する蜂の生態にも着目され、われわれがその恩恵に浴することも見逃さない（篠　弘）

栗木　京子　選

選者賞

区画整理

安達由利男（埼　玉）

みはるかす四十町歩の早苗田の天つ空舞ふ白鷺のむれ
享保よりつくり継がれし新田の歴史は閉ぢぬ区画整理に
区画整理の土と書かれて街道に黒き袋は並べ積まれぬ
一面の麦の畑に埋め立ての重機が入りて二年を経ぬ
ひたひたと寄せくる波を思ひつつ遊水池の予定地にたつ
朝靄におぼろとなりて日が昇る六兵衛様の屋敷の上に
転作に六兵衛様のつくりたるぶだう畑も荒れはじめたり
右もんま左かすかべ傾ぎ立つ石の標は辻に残りぬ
往診に終の心音拾ひしは幾人なるかこの聴診器
清次さん逝きて三年か内牧に「車力さん」とふ呼び名も絶えぬ
一人にて農に生き来しとめさんに診断書をかく介護施設の
姥がもう蕎麦をつくらぬ畑に咲く菖蒲の花のにほふ紫
遠き日に倒れしものの魂鎮め馬頭観音辻に苔むす
「この医院子供の頃を思い出す」言はれておもふ四十年を
一代にて医院を終ふと花の香の青くただよふ椎を仰ぎぬ

選評

本賞は十五首の一連から成る。十五首で一つの物語をつくる必要はなく、屹立した一首ずつを並べても構わない。ただ、できれば一連の背後から作者像が浮かび上がってくれば読者も作品世界に入っていきやすくなる。

選者賞の「区画整理」は田畑が失われていく街の姿を詠んでいる。「六兵衛様の屋敷」「右もんま左かすかべ」「馬頭観音」などの言葉が土地の温もりを伝えてくる。作者が長らくこの地で医院を開業してきた、という歳月の重みが一連に実感をもたらしている。

一人にて農に生き来しとめさんに診断書をかく介護施設の

この歌からは、高齢化によって農業が廃れていく現実を如実に読み取ることができる。

奨励賞の「白紙の未来」は感性のみずみずしい勢いに注目した。昇降口の風、階段の隅の埃、かもを飼う小屋、部室の毛虫、購買のパンなど、細部の描写に体温が通っており、明るさの中にひとすじの孤独感が光っているところに作者の個性を感じた。

奨励賞の「隔離の島」はハンセン病の強制隔離への憤りと悲しみを詠む。差別の歴史を忘れてはいけない、という強い思い。コロナ禍と重ね合わせた十五首目が印象に残った。

奨励賞

白紙の未来

渡邉　美愛（愛　知）

校門をくぐり見上げる　冬の陽を根とし土とし咲く梅の花
ねむそうな昇降口を開け放ちしんと締まった風を喰わせる
階段の隅にかなしく寄せられて埃は抱いてもらう日を待つ
ひかり射す廊下を走る本鈴の余韻が消えるまでが勝負だ
駆け込めば友は絵本のチェシャ猫のようににんまりお疲れと言う
号令をかける委員の金髪に教師が気づくまでの三分
教室という名の青く深い森　四十人の鼓動が満ちる
きっちりと並ぶ机は舟となり生徒をねむる海へと運ぶ
こんなにも恋してしまうすれ違う度に檸檬の香を震わせて
かも小屋のクウはしずかに俯いてどこかに消えた双子を探す
高跳びのバーをふうわり飛び越えて前世は天使だった後輩
介錯を見据える武士の顔つきで友は部室の毛虫をつまむ
ぼくたちの胸の孤独を分けあえば時折それは鳥として飛ぶ
喧騒は葉擦れのようでかろやかに空中を舞う購買のパン
十六のぼくに翼はないけれど良くも悪くも白紙の未来

奨励賞

隔離の島

荒井　玲子（鳥　取）

歴史とう重さ抱えて静かなり隔離の島の長島愛生園
三朝下（みささした）・大仙（だいせん）というふるさとの地名残せる園内バス停
口中に残りいる最後の親不知歯抜かれていよよ遠きふるさと
焼き芋を赤子の温さと懐に入れてほほえむ児を持てぬ君
子どもの日母の日父の日関りもなくハンセン病の療養所に老ゆ
ファミレスは家族のない人お断りハンセン病の人らの痛み
鎹（かすがい）の子も無きままに七十年隔離の島に生きて逝きたり
歌詠みし人らはなべて旅立ちぬ長島歌会は消滅したり
読み継がれし『小島の春』は隔離への協力書という人権集会
ふるさとの家族を思いハンセン病原告団に友はならざり
舟付き場も監房跡地も補修され世界遺産へ動き出したり
長島の入所者なべて高齢なり納骨堂のみ残る日の来る
ハンセン病の強制隔離という言葉忘れ消えゆく日も遠からじ
魂は自在にあれと丘に建つ「風の舞」とう残骨の塚
隔離とう言葉飛び交うコロナ禍に病の差別をしてはいけない

佐伯　裕子　選

選者賞

父生れし陸前高田

柴田　綾子（東　京）

父生れし陸前高田の町が消ゆ東日本の大震災に
亡父ならば「なじょにしたい」と胸に問いひたすら探りき高田行く道
新聞の死亡記事欄に名無きこと祈りて読むも七人の名ありき
被災物山と積まれし道脇に対の雛人形置きてあり
自衛隊・県名書かるパトカーに姉出会うたび深くお辞儀す
空覆うベルトコンベア組み立ちて高田の町は復興に向う
山削り盛り土重ね造る町住み処追われし鹿に出会いき
松原の松に放射能あるやもと処分叶わず送り返さるという
いとこらの眠りし墓を探しゆく数多彫らるる平成二十一年三月十一日
断たれたる鉄路に代わりリスの絵の「バス高速輸送システム」走る
埒もないことの起こりて八年過ぐ「家を建てた」と便りの届く
二階建てプレハブ市役所地震（なゐ）十一年目新庁舎に
浄土寺に植うる桜の咲き継ぎぬ「津波到達」の地点を印す
ま青なる空を流るる雲よ見よ亡父の生地の変わりゆく姿
被災地と呼ばれる町の増えしいま次は吾の身にか壊れゆく地球

選評

選者賞に推した「父生れし陸前高田」は、東日本大震災後に復興されていく故郷がうたわれています。「亡父」ならば、どのようにしたかったのか。作者は自らに問い続けます。その問いが、平板に造成される新しい陸前高田に、失われた地を呼び寄せるようでした。

山削り盛り土重ね造る町住み処追われし鹿に出会いき

実景を率直に写すことで、喪失の思いを重ねていく手法です。「陸前高田」が、忘れがたく悲しい地名になってしまったこと。その事実を知らせる連作になっています。

「空の迷路」は、障害児を教える日々が生き生きと描かれた連作です。作者の観察力の鋭さが、障害をもつ子の心を摑み出します。

物言わぬ日を重ねいるAくんの手に握りしむる透明人間

「Aくん」の孤独が下句で深々と伝わってきます。眼差しに力があればこその歌と思われます。

「春の水脈」は、祖父の葬儀で知った感慨、生死は背中合わせという実感が生きています。

誰かの追憶の中に息をしてをり亡きひとも在るひともまた

選ぶ時、観察眼の生きた作品に注目しました。日々の何気ない生活の歌も同様なのです。

奨励賞

空の迷路

中里茉莉子（青　森）

ぐいっぐいっとジャングルジムをよじ登り空の迷路に子はゆき惑う
かくれんぼする子らいつか姿消え有刺鉄線に区切らるる原
馬鈴薯の真白き花を瓶にさし月曜の朝の教室ひらく
傾ける地球の危うさ魂の芯に知る子か自閉と呼ばず
不ぞろいのことば机に散乱し少年の視線合いがたき日は
物言わぬ日を重ねいるAくんの手に握りしむる透明人間
教室をとび出しゆける少年を真昼のプールは水たたえ待つ
少年に噛みつかれたる腕の跡わが結実の一つと思う
子らと走る若き教師のTシャツに乳房弾める新しき夏
得意気に宙がえりしてみせる子のポケットの中よりこぼれくる砂
眠らんとして少年のはずしたる義足静かにかたわらに添う
障害ではなくある時輝く個性です少年と跳ぶトランポリンに
物語のさりげなき発端となるならん初秋の峡に湧く水ひかる
知らないまちを迷子のように歩きたしわれを立ち去りゆきし時間は
新雪の朝をゆきたる少年の長靴の跡きりりとつづく

奨励賞

春の水脈

山火こいろ（東　京）

古書店のやうにあなたの文字はあり遠い街から灯りがともる
夫（つま）亡くし佇む祖母の背に映るワイドショーが告げる大寒
お悔やみの電話の声のくぐもりてコロナかと問ふささやくやうに
手を取りて別るることは奇跡なり疫病による死を知ればこそ
色とりどりの思ひ出を贈られて棺の中に春は来にけり
白無垢と白装束は似てゐたり旅立つ時のかほ美しき
逝く人の終の化粧に花落としまばゆくもあれ生の痛みは
火葬場はまだ寒くあり待合でわれ家族らは菓子を分け合ふ
雪と桜の似たることはらはらと白き齢を重ねて落つる
あるときにあると気づけばよかつたと祖母は花瓶をいくつも増やす
花開く前の狭間のしづけさのあなたのゐない一世（ひとよ）を思ふ
誰かの追憶の中に息をしてをり亡きひとも在るひともまた
生きてゐるものはにごりを持つものと気づけば淡きシャワーのひかり
「ありがとう」ふと手を取れば「なに?」などと聞かれてをりぬ朝の緑道
たしかめるためにあなたの頬に触れ解き放ちゆく春の水脈

篠　弘選

選者賞

隔離の島

荒井　玲子（鳥　取）

歴史とう重さ抱えて静かなり隔離の島の長島愛生園
三朝下（みささした）・大仙（だいせん）というふるさとの地名残せる園内バス停
口中に残りいる最後の親不知歯抜かれていよよ遠きふるさと
焼き芋を赤子の温さと懐に入れてほほえむ児を持てぬ君
子どもの日母の日父の日関りもなくハンセン病の療養所に老ゆ
ファミレスは家族のない人お断りハンセン病の人らの痛み
鎹（かすがい）の子も無きままに七十年隔離の島に生きて逝きたり
歌詠みし人らはなべて旅立ちぬ長島歌会は消滅したり
読み継がれし『小島の春』は隔離への協力書という人権集会
ふるさとの家族を思いハンセン病原告団に友はならざり
舟付き場も監房跡地も補修され世界遺産へ動き出したり
長島の入所者なべて高齢なり納骨堂のみ残る日の来る
ハンセン病の強制隔離という言葉忘れ消えゆく日も遠からじ
魂は自在にあれと丘に建つ「風の舞」とう残骨の塚
隔離とう言葉飛び交うコロナ禍に病の差別をしてはいけない

選評

「隔離の島」半世紀以上にわたり、多摩全生園の短歌の指導をしてきた者として、表現力の確実な長嶋愛生園の一連を推したい。今や家族のない孤独な暮らしをいとおしむ。このところ歌壇で、家族詠が根強いブームとなっていることと無縁ではない。生き残った者の限りない寂しさの表現は、「強制隔離」を味わった作者の悲鳴を聞く思いがする。

「不揃ひ野菜」目下家庭菜園で栽培する野菜が、十点以上も詠み込まれた珍しい一連。形は「不揃ひ」ながら「味良き」ことを愉しむ作者。〈黒土を手で掻きやればころころと笑むとも見ゆるじやが芋の顔〉に注目したが、栽培に失敗した歌が欲しい。さらには、作者の環境や生き方といったものが、更に現出する方法を駆使されたい。また家庭菜園が流行する時代がくるにちがいない。

「西風吹かば」この一連の中心は、四首目の〈秋仕舞ひ終へて一息つけば直ぐ季節雇ひの都会（まち）へ向かひき〉をめぐり、作者の農業の実態と家庭の状況を掘り下げるべきではなかったか。作者の生きる農村とその風土のもつ光景が素直に詠まれていて、レベルの高さを保っているが、テーマ意識の深まりを求めたい。十五首の連作の必然性を一考されたい。

奨励賞

不揃ひ野菜

角田　正雄（宮　城）

廃材を集めて造る用具庫に春は立ちくる家庭菜園

燦々と昇る朝陽を身に浴びて人参の芽が背筋を伸ばす

三度目の二十日大根いつせいに芽吹き初めたり拍手するがに

ラディッシュはぬくぬく育てて辛味なし子育て気分も舌に転がす

間引き菜の味良きことを知りてより種蒔き終へてまたひと捻り

梅雨明けの近きゴーヤの棚隅に光あたらし雌花一輪

収穫の顔もほころぶ芽キャベツのころりころころ青虫ぽろり

大鉢に植ゑし大葉の無農薬を自慢しながら飛蝗（ばった）と分け合ふ

黒土を手で掻きやればころころと笑むとも見ゆるじやが芋の顔

ささやかな夢をいつぱい転がして籠に盛られし不揃ひ野菜

無骨でも何処にも負けず新鮮な「自産自消」の野菜を喰らふ

声掛かり出番得たりと立ち上がる「大葉十枚パセリを五本」

甘きこと殊の外なりすすむ箸　鵯（ひよ）が突きし残りの雪菜

草を引き追肥施し土を寄せ育てし葱をねんごろに抜く

枯庭に並べ干さるる白菜の陽を浴びて尚やはらかき色

奨励賞

西風吹かば

上村　篤彦（岐　阜）

西山を吹き来る風にかすかなる父の口笛紛れてゐさうな

切れぎれの曲は美智也か八郎か枯草を焚く晩秋の畑

燃えあがる焔の向かうに口笛の若き農夫が草を掻き寄す

秋仕舞ひ終へて一息つけば直ぐ季節雇ひの都会（まち）へ向かひき

雪深き冬をうらさび春を待つ母子へ届く油紙の小包

谷川の水音高く野へ里へ脈打つごとく流れゆきたり

家家のかまどや風呂に火の入りて白き煙はやはらかに立つ

色白の軀体に日焼けの顔が乗りロボットめきし猿股の父

時に吾の顔を忘れてゐる父の他人行儀な言葉が刺さる

意味もなくただ繰り返すそのイミを問ひて責めにき意味なぞ無いに

うなだれて抗ひもせで眼をつぶり無言の行へと堕ちてゆきたり

其の時のさほど遠くはないといふ覚悟を噛みしめ病室を出づ

特上の色を深めてさはさはと大き楓の葉は散りにけり

浄土より西風吹かば疾く行きて畑に聴かむ「哀愁列車」

毘沙門岳（びしゃもん）にふたたびの雪ふりつめばやがて里にも冬の訪れ

入選

※十五首のうち、八首を抄出しました
都道府県別名前五十音順に掲載してあります。

蜃気楼の町

木立　徹（青　森）

砂漠へと変はるこの町オアシスをもとめて一羽の鳥が飛び立つ
砂浜に三角定規を突き刺して夏の光を拾ひあつめる
ゆらゆらと沖の彼方に現はるる遠い記憶の蜃気楼の町
幻のメガロポリスに出会ふとき逆回転をはじめる時計
バビロンの塔のごとくにいつの日か蜃気楼となるスカイツリーも
はるか沖の水平線から神殿が立ち上がるなりムー大陸の
古代都市滅ぶすがたに蜃気楼が指の先から崩れ落ちたり
この町もわれも真夏の蜃気楼となりて消えゆく波の彼方に

遠き青空

鈴木　仁（秋　田）

野馬追の祭りを告げる法螺貝を朝日ののぼる神域に抱く
被災せし屋根を包みしシートまだ外せぬままの欠けた未来図
睨むほど未来を見詰めいるダルマ双葉の澄みし空へと担ぐ
それぞれに柚子の木を持つ富岡の冬は光に触れて始まる
ストーブを囲みて座るパイプ椅子避難せし日のままに残りぬ
八木沢のトンネルを抜け帰りゆく十年前の飯舘の春
盂蘭盆の空は渚となり海の彼方へ消えし子らの声聞く
ふるさとは桜の町と答えしも夜の森遠き春の青空

夢の隙間を

池村　真理（山　形）

アルバムを開けば遠き日のわれの直ぐなる眼差し問ひかけて来る
その後の険しき道を知らず笑む幼き君の写真に出会ふ
色あせし『いないいないばあ』の絵本にはママたりし日々しづかに眠る
音もなく白妙の雪くれぐれと病む夫に降りわれに降り積む
父を奪ひ母も奪ひしかの秋は償ふやうに空澄みてゐき
ふうらりと小雪ただよふ昼下がりしづかに詠ひ始むる挽歌
嫁たりし日々は遠くになりゆくも今も問ひゐる「家」といふもの
ゆるらかに回転木馬は回りをりさくら降る夜の夢の隙間を

ふくしま被曝十年

河野　徳子（栃　木）

核拡散防止条約批准せぬ被爆国日本はフクシマも見た
心細きことであったろう人居らぬ街を彷徨う黒牛五頭
人住めぬ里は野獣の森と化す赤い屋根の家飲み込まれつつ
餌をまく人に寄り来る黒牛を被曝ゆえ命を絶てという
鉄柵に体突き上げ慟哭す安楽死させらる牛の仲間が
セシウム値合格と笑む十年を試験栽培せし米農家
芽生えたる杉に光が届くよう山師ほがらに間伐をなす
福、笑いネットで買いぬなすひかり愛する身にも今できること

人間証明

迪　瑠（群　馬）

結婚をするにあたつて仕事では旧姓使用と意志表明す
「旧姓のあなたは居ない」ここにゐるワタシハダレダ　霧雨の中
夫の姓になるのが嫌なわけでなくわたしはわたしで居たかつただけ
知らぬうち書類の名前は新姓にかきかへられて息ができない
新姓と旧姓のわたし同一の人間証明できなくなりて
旧姓を自動車免許に併記することができるとテレビが話す
足早に市役所へ行く戻りゆく旧姓に心とりもどしてゆく
風向きは変はつていつた仕事するわたしの居場所をつかみとりたり

オフィス新常態

内藤　剛（埼　玉）

密なのでリモート参加でいいですかドラマの決めぜりふのように言い
リモートの会議五分前ログインは早く来すぎたデートの気分
消音のオンオフチェックPCの前に座ったアリバイとなり
ミュートになってますよと声かけてごめんごめんと動きだす会議
グルグルと古代帝国の太陽が輝き画面と議論が凍る
商談で相手の表情読み切れずマスクが阻むビジネスチャンス
アクリル板指紋汚れに目が行って午後の商談欠ける集中
距離保ちマスク越し会議した後スキの多い議事録見直す

祈り遺さむ

房野　明美（埼　玉）

千年後みどりの陸（をか）を懐かしみ歌ふイルカは吾かもしれぬ
トリチウム海に捨てられ増えゆかば大丈夫かなホタテのお寿司
人どうし争ふ余裕はないはずと空は嘆いて大地は怒る
子の代で閉ざすのもよしすぐ上が横田基地への航路のわが家
最高のコンピュータよりこの婆が知つてゐるのは愛と悲しみ
誇らかに光る金銀銅メダル何やら格差の色に見えます
百年後存（あ）らば歴史の教科書に如何に記されむコロナの時代
財産も孫もなけれど祖母として核廃絶の祈り遺さむ

弘南鉄道大鰐線

鈴木ひろ子（千　葉）

三年前の大鰐駅と変はりなくおうなが一人切符売りをり
乗り放題乗り降り自由のきつぷ買へばお米とカードのプレゼント付く
ねぷたの絵と園児の工作飾らるる車内を一周みありく吾は
たわわなるりんご畑の中をゆくワンマン列車に乗る人わづか
一時間に一度列車の行き違ふ津軽大沢駅に降り立つ
若き技師が車両整備の手を止めて車輪の下など見せてくれたり
六十年車両整備に使はるる検修所の中夫と歩む
ゆつくりと揺れつつ走るわが列車に保線作業の人等手をふる

薔薇の壁紙

芍　葉（千　葉）

ほそく開けた窓から梔子の匂う　シスターになる夢から醒めて
〈はい・いいえ〉割り振っていくわたくしの心にすこし水が足りない
出血を知らぬ女のいないこと　待合室の薔薇の壁紙
病院は数字によって統べられて番号札を握るひとびと
うす青の検査着の丈みじかくて両くるぶしをさすって待ちぬ
いつだって陽気な色で出てしまう血液という素直ないきもの
水平に潰されてゆく乳房（にゅうぼう）の生涯に浴びるエックス線量
安心もあきらめもまだ遠すぎて猫背で守る胸のふくらみ

(Re) production

丑野つらみ（東　京）

今年から不妊治療を始めたという同級生ついに現る
ちょっとした車を買える金額をかけて生まれてくる子どもたち
待合に置かれた本の表紙には「人生ゲームに勝つ方法」と
生産性、ございますという顔をして看護師さんと雑談をする
点滴の管を引っかけ青ざめるたびに絆の語源を思う
くらやみで胎児もきっとつらかろう訳のわからんコードにまみれ
泣き声が聞こえる　わけのわからないこの世に産み落とされて泣いてる
この世って地獄じゃないよたぶんそう泣いてわめいて生きのびような

ほのかに進む

とみた　律（東　京）

遠くからでもはっきりと看板のピクトグラムが家族に見える
間隔をあけてご利用くださいと書かれた椅子に残る体温
動かない時計が空に浮かんでる再開の日を待つ観覧車
天井の蛍光灯に正解があるかのように見つめてしまう
花びらで滑る地面を踏みしめるほのかに進むバス待ちの列
すんなりと行けばいいのに人工の芝生の上に残る雨粒
再開をしたゴンドラがほんのりと明るい〇を夜空に描く
荷造りも終わりが見えてカーテンを外した部屋に入る夏の陽

真朱のネイル

熊倉アンナ（東　京）

ふとふれた乳房にかたい実をみつけふみ子の歌が今ひびきだす
ちはやぶる神が命令下すよう　最初の火ようと手術日決まる
入院はまだ先だねとSAPPOROのコップにきみが夜をつぎ足す
わたしいま今がほんものオペ前にぬぐわなくては真朱のネイル
のりかえの駅に花たちあつまってわたしを生かす会議している
めいっぱい開けても顔は出せぬ窓あけて五月を個室へまねく
酸素とれナースとあるく思うより歩ける廊下のさきの夕映え
病人はくっきりやめて前あきの肌着とパジャマに眠ってもらう

マミさんの膝

杉原　真実（東　京）

ふうわりとスローモーションのごとくにも崩れ落ちたり　膝を破壊す
欲しいものまずはノートと答えたりメモ魔の我は入院中も
作られしＬＩＮＥグループ不名誉な「マミさんの膝」夫と子供ら
娘から差し入れ届く金曜日短歌とイラスト添えられており
運転を上手いと褒められ車椅子ペーパードライバーの我なり
励ましのメールいくつも届きたり手術日のあさ梅雨晴れのそら
初めての土地を旅しているように病院という街を味わう
晴れ晴れと入院生活終わりけり明日からのこと明日に任せて

群れず

関沢由紀子（東　京）

修学旅行　行けないままに高三になりし生徒達（きみら）の低めの体温
同じ釜の飯を食ふこともうなくて打ち明け話をする夜もない
部屋にゐて参加のできる説明会いつたい何がわかるのだらう
核家族がふつうの家族である今をさらに分断していくコロナ
平成に子ども三人生みし吾は絶滅危惧種になるかもしれず
群れて過ごす安心感と愉しさをそのうち人は忘れるだらうか
感染者五千七百七十三孤独を厭ふ東京都民
わたくしの話を聞いてくれるのは盛りをすぎた皇帝ダリア

村人とドイツ兵の「第九」

中澤　明子（東　京）

ベートーヴェン「第九」初演が徳島の板東の地と知る人わずか
頻繁に人の往来あったはずの板東駅舎いま無人なり
古ぼけた地図に母校と霊山寺第一札所がうっすら映る
山陰（やまかげ）の〈俘虜収容所〉跡寂し極東の片隅に捕虜の影
千人のコミュニティに塀は無く自由を認めた松江豊寿（とよひさ）
村人と田植、稲刈り、パン作り楽器集めに奔走の日々
潮騒が寄せ来るようなはるかなる祖国の調べ交響曲は
人はみな兄弟と歌い歓喜する「第九」が巡る空海の里

溜息

野田ちはる（東　京）

アクセント記号は非常勤の非へ強くなりゆく紙飛行機
もぎたての林檎のように全身のなみだを燃やしきみも生きてる
右耳を胸に押し当て脈の音に眠る睫毛はまだ濡れており
左だけ脱げては履かせまた脱げて子どもの足のミリの大きさ
がむしゃらなスコップの砂はざらざらと吾の笑窪まで埋めようとする
床を這い壁を這い底冷えの朝次亜塩素酸をなすりつけゆく
違和ばかり真冬の気温十九度渦を巻く退職クラスター
春はゆく早すぎるよとつぶやけば溜息にさえ舞う花吹雪

いのちのうつわ

森田　公子（東　京）

広莫な時空の中で今ここに我在る所以はいのちのうつわ
発生の歴史を辿りヒトとなる胎児よ汝にはもう名がついた
エコーにて胎生八週十八ミリ汝の手にはまだ水掻きがある
雑音のようなるザザザのいとおしさエコー検査の胎児心音
四ヶ月羊水の海を飲み込んで指しゃぶりだってできるのだ汝は
汝と我と二つの鼓動は分けられて嬰児は海を忘れるだろう
雪の朝なだらかに音吸い取られ我が胸に熱く乳飲み子の息
雛の月三十数回めぐり来て今度は汝れが親となり行く

終点

吉村おもち（東　京）

コンパクト火葬プランの領収書をコピーしている静かな真昼
この度は、その先はまだ言わないで事務手続きの案内をする
葬祭の日を訊くときの異分子のようなわたしを許してほしい
弔という字の左右差は残された人の心のようだと思う
どのように映るだろうか父母の健在なわたしの一礼は
葬祭の証明ばかり写し取るコピー機の頭を撫でてやる
黒ばかり着る人になる透明な存在としてここにいるため
事務職員Aとしてまた生きてゆくわたしは終点で通過点

離陸

渡部　ひの（東　京）

夜どおしの熱をはらんであたたかい父のあたまのかすかな湿り
使い捨て医療ガウンを脱ぎながらまだはっきりとしてこない朝
火葬場のコーラの瓶のうつくしさ世界のふちに生きのびていて
人という器にながれこんだ水すべてが燃やされるまで待った
人ひとり抱えることをこんなにもたやすいことにしてしまった日
かさぶたをそっとはがしてみるようなソラスタルジア遺影に水を
いつの日かベルリンへゆくのこされた小さな辞書と写真をつれて
まなざしは淡く空へとほどかれてあなたはここを離陸してゆく

夕鷺

小林　瑞枝（神奈川）

百人のいのちの二百の網膜に約束された未来図二百
眼球はあなたがどんなにつらくても前しか見せぬ水晶の玉
掌の上に磨いた木の実を置くように術前の抗不安薬を君へ
網膜がひとの心を鑑みて耐えうるものだけ選んでくれたら
弱まれる視界に記憶は寄りそえり晩年のモネに光あふれる
待合のパティオにすいっと降りてきてブルーベリーの青探る百舌
眼をふせて不意の光を畏れいるひとに近づく夕鷺の如
朝獲りのトマトをくれたトキさんへ薬袋の文字おおきく記す

踏み出す

迪方　温咨（神奈川）

車窓より一日分の光浴び景色の見えぬ執務室に入る
いくつもの防犯カメラに映り込み今日のアリバイ作りゆくなり
昨日も遅かったのだろう同僚の勤務記録をそっと確かむ
君の言う「あなたのことを思って」の「あなた」に同化できずに我は
D評価今年も受けん生活の糧と居場所の保障のために
治らない病気でも生きると決めた大震災の余韻の中で
「知り合いがあなたと同じ病気で」と声掛けられる日の来たりけり
左、右、左の次に前、後ろ確かめてからよっと踏み出す

転職

丸山　貴（神奈川）

夢破れキックボクサー辞めし時つぶしのきかぬ我が身を知れり
田舎者食の都は銀座なり思いて勤むダイニングバー
ためらわれ前職伏せて仕事する風来坊の中年として
刺場より罵り合いと割れる音若き一人が刃物を握る
釜蓋と木べらをかざし我走る庖丁上げし男のもとへ
「庖丁を置いて下さい」丁寧に怒鳴れば男置きて出てゆく
「すぐ辞めるだろう」と言った職人ら我の意外な本気度を知る
反撃の狼煙を上げろロープ背に防戦続く我が人生に

白髪（はくはつ）とZOO（ズー）（動物園）

中島キヌヨ（長　野）

密を避け出掛けし地元動物園　消化し切れぬ思ひ残れり
如月の動物園に小雨落つかじかみ買へる年間パスポート
春寒に暖取る如くイヌワシは温き陽の射す下方にをれり
雌トビは保護され既に四半世紀獣舎に老いたり吾れも老いたり
人気獣舎を背にすればひつそりとホンドキツネに冬の陽光
次年度の代表選挙に一票す「イケメン党のトビの角（かく）さん」に
ロバの背の大き十字の毛模様に子ろばに乗れるキリスト重ぬ
極寒の恋しからうね信州といへども厳暑をトナカイの母子

花梨

ともえ夕夏（岐　阜）

結婚は惨き約束　半身をうしなふやうに名前がかはる
やさしさうなどとまはりのひとの言ふ羆のやうなかたちの夫（つま）を
気の強きをんなに柔く笑むひとを育てしひとも激しかりけり
朝つぱらから同じもの食べあひて今日を重ねる家族の儀式
若さとは弾力　焼きたてのパンのナイフを拒み抗ふやうな
利き手だといふのに不器用わたくしを包むことしかしないこの手は
花梨、花梨　今年はふたつわたくしの子宮によく似たかたちに実る
あたらしき喪服をあつらふる春べどちらが先に逝くか言ひあふ

夢

後藤　瑞義（静　岡）

眠剤を増量しても自閉症病む子の脳波検査進まぬ
ムンク作「叫び」のように子は耳を押さえていたり少し震えて
障害のこの子のために死ねないと言いいし妻の三回忌過ぐ
自閉児のわが子落穂を拾うごとあますなくゴミを拾い終えたり
魚（うお）の絵を見せてお腹をさする子よ「わかった夜はさかなにしよう」
自閉児のわが子と会話する夢を見たく今宵も寝につかんとす
くちなしの咲く道施設に戻る子に「お花きれい」と言えばうなずく
一生は苦しみごとの連続と思えど子よりは除きやりたし

青銅の花瓶

岡本　洋子（愛　知）

青銅の花瓶に野の花挿す母の背なは穏やか虚実を秘めて
開ききり危うく揺れるチューリップを母と見ていた日暮れの縁側
いのちありて言葉届かぬのか母よ窓を見やればコスモスの原
渦を巻き流れる冬の海峡の吊り橋渡る母なき知らせに
通夜更けておとうと見る母の胸にきれいに残る乳癌の痕
ほんとうは頑固な母さんだったねと微かに笑う涙のおとうと
箸先に崩れてはらと散る骨をやがて来る死のわれとも見つつ
青銅の花瓶ひとつがある窓辺暮れゆく夏の静謐を見る

異界へと

岡田奈紀佐（愛　知）

三叉路にたたずんでいる猫だけが知る異界への行き方がある
公園に遊ぶ子どもの声がしてカラスが鳴いてもまだ帰らない
手放したものに手向けるためでなくただ飾るために花を購う
婦人科の薬の袋のメモ書きのこれは確かにわたしの文字だ
採血の絆創膏をはがすとき一緒に抜けた腕の毛がある
母性とは何なのだろうぼんやりと考えていた考えただけ
できるなら異界へ転生する前にフラペチーノを飲んでおきたい
浴室の壊れたままの換気扇　だいじょうぶって笑って言える

はないちもんめ

田中亜紀子（三　重）

陽に透ける若葉見上げてじゃあまたと告げて会えない人を数える
学生の来ない研究室にある六人用のテーブル広し
手に取ってもらえぬままに朽ちていく静かな書庫の本になりゆく
マスクして距離あけ座る学生のおしゃべり見ては見ぬふりをする
オンライン会議は続く生真面目な上司の邪魔をする蟬の声
役に立つひとであること求められ私を否定するのも私
残酷なはないちもんめいつまでも続くあの子があの子が欲しい
人混みに鬼紛れ込み今日もまた仲間を探し続けて終わる

白木槿

高橋よしこ（京　都）

一日で散ると知りつつ白木槿一枝切りてデイサービスに行く
二十四色（よいろ）の色鉛筆で浮世絵を塗りいる白寿　集中を切らず
車椅子の老人たちは野に摘みしひっつき虫のひっつくを喜ぶ
「もう帰る」「お昼を食べて帰ろうね」抱いた人形に「泣いたらあかん」
髪洗い乾かして編むていねいにそれがその日の尊厳を守る
ドライヤーの風にそよぐ耳たぶは聞きたいことだけ聞こえればよい
あれはどこバッグを開けてまた閉める亡母（はは）には待ってやれなかった時間
七枚のパジャマが風と戯れるグループホームはお昼寝タイム

音楽が好きだった奴

川吹　利夫（京　都）

「落ち着いて聞いてくれよ」と父の声スマホ持つ手が硬くなりゆく
「生きている理由が分からなかった」と遺書の代わりのメモ書きにあり
弟が着ていた物が入れられた袋のなかの赤黒い染み
青色のビニールシートかけられた人の大きさほどの塊
弟の死に顔くらい見てやるが崩れた母の顔は見られず
ギターやらキーボードやら何やらが埋もれた部屋に川の字で寝る
骨壺を私の子だと抱（いだ）く母もはや顔から「悲しみ」は消え
幼き日　親のレコードばかり聴き古い演歌を弾いていた奴

スイッチオフ

尾崎輪香子（大　阪）

夜の街を切り裂くように走りぬき電車は黙って地下へともぐる
地下鉄のドレスコードは黒ならん黒いコートであふれるホーム
残業を終えたるのちの地下鉄はほわんとゆりかごみたいにゆれる
いつもより二駅先のカフェで飲む珈琲は少し波立っている
朗らかに常連客らは笑いおり居るけどいない我を残して
連結部に片足のせてぐらんぐらんゆれて頭をからっぽにする
二駅分もどる五分で雑念を消してスイッチオフとなる我
あしたには忘れてしまう今日のこと小さな笑いとため息ひとつ

誰のものでもなく

黒木　淳子（大　阪）

八月に巣立つすずめがいることを両の眼に知る　大阪猛暑
わが庭の木犀は鳥かごになる夏の熱風容赦なく吹く
突き放してくれる母いて寄り添ってくれる父おり子すずめ育つ
啼くことについにくたびれ果てた子は親鳥を待つ夕立の来る
夕立は雀のからだごと濡らす　照りながら降る降りながら照る
しっかりと一日を生きた証あり砂場にくぼみ残しすずめは
皆で来て皆で帰ってゆくときの礼儀作法をすずめに学ぶ
君たちのあす君たちのあさってぞ誰のものでもなく君たちの

足だけの虹

野並　和子（大　阪）

悲鳴にもいつかは慣れていくものかイヤホンで耳閉じる大部屋
25時半の御手洗い　点滴に絡まれ逆回転してみる
静かなる救急病棟6階の3／1（サンブンノイチ）は無人のエリア
そそくさと隣のベッドでくだされる膵臓癌の確定診断
この匂いはカレイの煮付カチャ、カチャと宣告受けた人も食べてる
翌々日退院してったその人のベッドを見てる残った二人
足だけの虹の画像を送ったら返ってきたよ虹の全身
モーツァルトとバッハは告げる4時間の透析治療が終わったことを

被曝の森

前畠　一博（兵　庫）

阿武隈の景観みごとな森林は被曝の森となりて十年
ふるさとの前に塞がる看板は「この先帰還困難区域」
放射性セシウム残る森林はまるでおほきな実験圃場
水田はメガソーラーに置きかはり送電装置と化したる浪江
廃棄物貯蔵のために均されし大熊町の田畑と宅地
これからの子どもに先祖の森つなぐ十年ぶりの電動のこぎり
汚染地の百年先を見据ゑつつ森あきらめず人あきらめず
震災のあの日の津波押し寄せし海岸に立ち初日を拝む

母との時間

石井久美子（山　口）

歩こうと母がいうから海に来てこのまま死のうという手を摑む
晩年はみんな悲しいのかという今日はキラキラと芯のある目で
安い皿ばかり見つけて壁に投ぐ鬼かもしれない今日の私は
母一人動かせぬ吾を恨みつつ廊下で寝かす毛布をかけて
教え子に先生といわれ背を伸ばす後ろ姿はあの頃のまま
何も食べずひたすら母は眠りおり寝顔は九十のやわらかな顔
母亡くし後悔だけが残りおり何百年も経った気がする
来世もまた会おうねと母にいう大好きだった今ならわかる

コロナとわたし

新井　忠代（徳　島）

対岸の火事と見てゐしウイルスの類火延焼世界が燃える
恐る恐る会食せし後の二週間罪びとのやうに息を潜めて
県外ナンバーの車を見張るとふ歴史の闇の自警団よぎる
コロナ禍のレジ横に見る貼紙の「舐めた紙幣は受け取れません」
迎へ火を焚くこと忘れし盂蘭盆に棚経の僧マスクして読む
QRコードみたいなわが顔読み取りて「平熱です」と機器は告げをり
ワクチンの予約できたと誰彼に吹聴してをり手柄のやうに
二年越しのコロナ撲滅騒動もつまりはウィズコロナに落ち着く

高架を下る

二宮　史佳（香　川）

乗り換える車のパンフを見るように父の柩を選ぶ夜二時
まあまあいいお顔ですねと僧の言う白き面布をすこし捲って
火葬場のボタンは白い妹を振り返り返り見てゆっくり沈める
ご使用は自己責任で十歳の姪の受け取る骨上げの箸
父逝きて十日のうちにチョコレート半年分を空き箱にする
父住まぬ町を見つめる故郷は朝のニュースにときどき映る
病床の父に頼まれ差し入れた冒険譚をひらく雨の日
夕空へ飛びたき心を頂点にブレーキで均し高架を下る

孔雀が道路を渡る町

氏家　長子（香　川）

平飼いの孔雀が道路を渡る町たまごみたいな私の団地
いちまいの辞令で摑んだあの空のサフランブルーに滲むあかとき
動物も草花もひとも等間隔しずくしておりそれぞれの影
吉兆なり羽根を広げた孔雀には道を空けねばならぬしきたり
「作戦」に代わる言葉を探してた湾岸戦争中の部活は
林檎の木を見たことがない子どもらと蜜柑畑にただ埋もれり
つぎの波は一人にひとつの教室か未来のような今を生きゆく
もう誰もいないのだから追想に木立を描いた緞帳下ろす

北緯三十三西経百六

岡本　秀美（愛　媛）

風紋にうつるラクダの影長しアラモゴード核実験場跡
北緯三十三西経百六アラモゴード人類初のきのこ雲立つ
気の毒（sorry）は使ふが謝罪（apology）は最後まで閉ざすアグニュー博士は
〈すがりつく手のかげろふ〉の消えゆきし元安川のゆたかに流る
「ここはソオッと歩かにやいけんのですよ」語部の立つ原爆供養塔
端正な文字は氏名と避難先八月六日の校舎の壁の
暗がりにつと被爆死の学徒像　あなたの思ひを聞かせてほしい
扉へと歩むどの子もまつすぐなまなざしのままの平和資料館

村医者の吐息

小谷　了一（高　知）

口閉ざし地図を広げて眠りこむ子は現実の僻地医療に
やむなしの「自宅療養」飲み干せず医療スタッフきょう一人辞す
院長の撃ちかた止めの号令の届かぬままに夜の昼食
励ましてなんとかなると干からびた脳細胞を酒でうるおす
夜逃げとは言われぬように心して早く帰れとメール妻から
手や足がタイムカードのない医者に半歩一歩と距離置きはじむ
われさきに解き放された児ら走り「げんきでちゅか」と吾に飛びつく
まだふたつ足のあるのをたしかめて老医しぶとく腰のばしおり

モザイク

重松美智加（福　岡）

夏ズボン裾を五センチ伸ばす子の踝のうえ折り目が残る
十四歳モザイクドアの向こうにて身を錨とす湯船のじかん
月光の降り頻く庭にサボテンの花芽伸びゆく主砲のごとく
成長の痛みはじかにさわれない骨の騒いで眠れない子よ
庭の葉に團十郎茶の蟷螂が三角の顔かたぶけて居る
わが底を探るみたいな曲がり角石蒜の茎ぬんぬん伸びる
無駄だから読書はしないと言うひとのかぶせぬままのかつ丼の蓋
宣言の解かれし日暮れ幅跳びの砂を尻に付け子は帰り来ぬ

帆を張る生徒ら

夏野いづみ（福　岡）

クラスター発生したる体育館すみわたる空を窓に映して
守るべき生徒か学校の体面か　コロナウイルスは人の義を問う
人の波さけて歩めばいずこにも体温認証カメラが置かれる
サーモカメラに認証されたる体温はわれのいずこのぬくもりなるか
新学期迎えてわが立つ教壇に帆を張る生徒ら風がみなぎる
隔離期間終えて学校に出できたる生徒ら　青きひつじ田のごと
生徒らが手話にて歌う「求めなさい」道はそれぞれ手の向く方に
光となる勇気を持てと両の手を広げて詩を読むアマンダ・ゴーマン

昆虫食自販機

向井ゆき子（熊　本）

商店街の令和の道に出現す昆虫絵柄の昆虫食自販機
カッコ良さ一番サソリ２０００円この夏しばし売切表示
コオロギのスナックコロナスナックと見えて老眼すこし戸惑ふ
翁言ふ戦後の食糧難のときカエルの腿肉美味しかりしと
皮剝げば透明なりし毒蛇を焼きて食せし戦後昭和に
食糧難見越しの昆虫食自販機酷暑洪水地球の息切れ
人類よ立ち止まり見よわが地球バッタ大群森林火災
街角にアンドロイドがにつこりと昆虫クッキー売つてる未来